

(十四) 佛智の不思議と疑惑して

罪福信し善本と

修して淨土とねおふとは

胎生といふともきたまふ

佛智うたおふつみふおし

この心れおひしるまらば

くゆることろとむねとして

佛智の不思議とたのむし

己上二十三首佛不思議の彌

阿の御ちおひとうたおふつ

みとおとしらせんとあらは

せるなり

愚禿善信作

皇太子聖德奉讚

佛智不思議の擔願の

聖徳皇のめぐみにて

正定聚に歸入して

補處の彌勒のことくなり

救世觀音大菩薩

聖徳皇と示現して

多くのことくすてすして

阿摩のことくはるひたまふ

无始よりこのまたこの世まで

聖徳皇のあはれみにて

多くのことくはるひたまひ

阿摩のことくはるひたまふ

聖徳皇のあはれみにて

佛智不思議の擔願に

すゝめいれしめたまひて

住正定聚の身となれる

(十五) 他方の信を以んひとば

佛恩報せんためにとて

如來二種の廻向と

十方にひとしくひろむし

大慈救世聖徳皇

父のこくればはしませ

大悲救世觀世音

母のこくればはしませ

久遠劫よりこの世まで

あはれみまゝおぼへるこは

佛智不思議につけしめて

善惡淨穢もなかりけり

和國の教主聖徳皇

廣大恩徳謝しめたり

一心に歸命したてまつり

奉讚不退ならしめよ

上宮皇子方便三四し

和國の有情とあはれみて

如來の悲願と弘宣せり

慶喜奉讚せしむし

多生曠劫この世まで

あはれみおふれるこの身より

一心歸命たすして

奉讚ひまなくこのむし

聖德皇のたあはれみは

護持養育たすして

如來二種の迴向に

すゝめいれしめたはし

己上聖德奉讚十一首

愚禿悲歎述懷

浄土真宗に歸すれとも

眞實の心はありおたし

虚假不實のわが身にて

清淨の心もさらになし

外儀のすめたはひとこと

賢善精進現せしむ

貧瞋邪偽れほきゆ

奸詐もはし身にみたり

悪性ごらよやめおたし

こゝろは蛇蝎のごとくなり

修善も雜毒なるゆへに

虚假の行とろなつけたる

无慚无愧のこの身にて

まことのごゝろはなけれとも

彌陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ

小慈せうじ小悲せうひもなき身みにて

有情うじやう利益りやくはたもふまし

如來にょらいの願船くわんせんいまますは

苦海くかいといめておめたるるき

蛇蝎しやかく奸詐かひさのことろにて

自力じりき修善しゆぜんはおなふまし

如來にょらいの迴向えきやうとたのまては

无慚むざん无愧むくわいにてはてるせん

五濁ごじやく増ぞうのしるしには

この世よの道俗だうそくととくく

外儀ぐわいぎは佛敎ぶつこうのすめたにて

内心ないしん外道ぐわいだうと歸敬ききやうせり

おなしきおなや道俗だうそくの

良時りやうじ吉日きつじつ江えらはしめ

天神てんしん地祇ちぎとあめめつ

卜うらなひ占せん祭祀さいしつとめとす

僧そうろ法師ほふしのろの御名みかは

たうもきととゝきゝしめと

提婆たつば五邪ごじやの法ほふにゝて

いやしきものになつけたり

外道ぐわいどう梵士ぼんし尼乾にけん志しに

とゝろはめはらぬものとして

如來にょらいの法衣ほふえとつねにきて

一切いちぎつ鬼神きふじんとあめむめり

あやしきめなやこのころの

和國わこくの道俗だうそくみなとも

佛敎ぶつこうの威儀ゐぎをととゝして

天地てんちの鬼神きふじんと尊敬そんけいす

五濁ごじやく邪惡じあくのしるしには

僧そうろ法師ほふしといふ御名みかを

奴婢ぬひ僕使ひやくしになつけてる

いやしきものとさためたる

无戒名字の比丘なれと

末法濁世の世となりて

舍利弗目連にひとしくて

供養恭敬とすゝめしむ

罪業もとよりめたらなほし

妄想顛倒のなせるなり

心性もとよりきよけれと

この世はよことひとろなほき

末法惡世のめなしみは

南都北嶺の佛法者の

輿めく僧達力者法師

高位とてなす名としたり

佛法あなつるしるしには

比丘比丘尼と奴婢として

法師僧徒のたふとさも

僕従ものゝ名としたり

已上十六首これは愚禿か

おなしみなげきにして述

懐もしたりこの世の本寺

本山のいみしき僧と

よふすも法師とよふすも

うきことなり

釋親鸞書之

善光寺の如來の

われらとあはれみましくして

なればのうらなきたります

御名とましくぬ守屋にて

ろのしきほむのちをかまへし

疫癘あるひはこのゆくと

守屋おたくひはみまもたれ

ほむりちをいふまじなる

やすくすゝめんためりとして

ほとけと守屋まもやもまもすすめめく

とときの外道ぐわいどうみみななととももに

如來にょらいととほとけととめんためたり

この世よの佛法ぶつぽうののひとひとははみみあ

守屋まもやめめじじととははみみななととして

ほとけととまもまもすすめめくくのみのみににて

僧そうろろ法師ぼうしははいいちちめめり

弓削ゆきの守屋まもやの大連おほな

邪見よみききははままりりななききめめくくに

よろよろししののたたののよよめめちちゝゝめんめんと

やすやすゝゝほほととちちととままももすすめめくくちちり

親鸞しんらん八十八はちじゅうはち歳さい御筆ごひつ

獲とくのの字じはは因位いんゐののととききううる

とと獲とくとといいふふ得とくのの字じはは果位くわゐ

ののととききににいいたりたりててううるると

とと得といふなり名の字
 は因位のときのなを名と
 いふ號の字は果位のとき
 のなを號といふ自然とい
 ふは自はれたのつからとい
 ぶ行者のはからひにあら
 すしからしむといふこと
 はなり然といふはしから

しむといふことは行者の
 はからひにあらす如來の
 ちかひにてあるかゆへに
 法爾といふは如來の御ち
 かひなるかゆへにしから
 しむると法爾といふこと
 法爾は御ちかひなりける
 ゆへにすして行者のはか

らひなきをもちてこの也
 へに他方には義なきを義
 とすとしるべきなり
 自然といふはもとよりし
 知らしむるといふことは
 なり彌陀佛の御ちかひの
 もとより行者のはからひ
 にあらずして南无阿彌陀

佛とたのませたまひてむ
 かしんとは知らはせたま
 したるによりて行者のよ
 かしんとあし知らんと
 もねをはぬを自然とはま
 ぶすろときゝてさふらふ
 ちかひのやうは無上佛に
 ならしめんとちかひたま

へるなり无上佛とまふす
 はわたちとまふくまふしあ
 めわたちとまふくまふぬゆ
 に自然とはまふすなりあ
 たちまふくまふしあす
 きは無上涅槃とはまふす
 すあたちとまふくまふぬあ
 うとしらせんとてはしあ

に彌陀佛とろきゝならひ
 てさふらふ彌陀佛は自然
 のやうとしらせんれうな
 りこの道理とこゝろあつ
 るのちにはこの自然のこと
 とたしぬれさたすゝきに
 あらざるなりつねに自然
 むんたせは義がむと義と

すといふことばを義の
あるし

これは佛智の不思議にてあるなり
よしあしの文字ともしらぬ
ひとはみなまことのこと
ろなりけると善悪の字し
りおほはれほろることの
おたちなり是非しらす邪

正もあおぬことのみなり
小慈小悲もなけれとも名
利人師とこのむなり

右斯三帖和讚并正信偈
四帖一部者末代爲興際
板本開之者也而已

文明五年。三月日

已上

我說彼尊功德事
衆善无邊如海水
所獲善根清淨者
迴施衆生生彼國
世尊我一心
歸命盡十方
无碍光如來
願生安樂國

願以此功德
平等施一切
同發菩提心
往生安樂國

西方不可思議尊

法藏菩薩因位中

超發殊勝本弘擔

建立無上大慈願

思惟攝取經五劫

菩提妙果酬上願

滿足本擔歷十劫

壽命延長莫能量

能	普	超	種	廣	清	智	慈
破	放	逾	種	大	淨	惠	悲
无	難	十	功	莊	微	圓	深
明	思	方	德	嚴	妙	滿	遠
大	无	諸	悉	等	无	如	如
夜	碍	佛	成	具	邊	巨	虛
闇	光	國	滿	足	刹	海	空

常	貧	已	彌	集	如	名	智
覆	愛	能	陀	佛	來	聲	光
清	瞋	雖	佛	法	功	靡	明
淨	嫌	破	日	藏	德	不	朗
信	之	无	普	施	唯	聞	開
心	雲	明	照	凡	佛	十	慧
天	霧	闇	耀	愚	知	方	眼

譬猶如日月星宿
 雖覆煙霞雲霧等
 其雲霧下明无闇
 信知超日月光益
 必至无上淨信曉
 三有生之雲晴
 清淨无碍光耀朗
 一如法界真身顯

發信稱名光攝護
 亦獲現生无量德
 无边難思光不斷
 更无隔時處諸緣
 諸佛護念真莫疑
 十方同稱讚悅可
 惑染逆惡齊皆生
 謗法闡提迴皆往

如	開	中	印	唯	如	恃	當
來	大	夏	度	信	何	留	來
本	聖	日	西	釋	疑	此	之
誓	世	域	天	迦	惑	經	世
明	雄	之	之	如	斯	住	經
應	正	高	論	實	大	百	道
機	意	僧	家	言	願	歲	滅

難	造	證	宣	悉	龍	爲	釋
行	十	歡	說	能	樹	衆	迦
嶮	住	喜	大	摧	菩	告	如
路	毘	地	乘	破	薩	命	來
特	婆	生	无	无	興	南	楞
悲	娑	安	上	有	出	天	伽
憐	論	樂	法	見	世	竺	山

演	光	依	天	信	稱	應	易
暢	闡	修	親	心	名	以	往
不	橫	多	苦	清	號	恭	大
可	超	羅	薩	淨	疾	敬	道
思	本	顯	作	即	得	心	廣
議	弘	真	論	見	不	執	開
願	誓	實	說	佛	退	持	示

人	遊	即	得	必	歸	為	由
生	煩	證	至	獲	入	度	本
死	惱	寂	蓮	入	功	具	願
菌	林	滅	華	大	德	縛	力
示	現	平	藏	會	大	彰	迴
應	神	等	世	衆	寶	一	向
化	通	身	界	數	海	心	故

光	矜	深	善	至	一	像	三
明	哀	籍	導	安	生	末	不
名	定	本	獨	養	造	法	三
號	散	願	明	界	惡	滅	信
示	與	興	佛	證	遇	同	誨
因	逆	真	正	妙	弘	悲	慤
緣	惡	宗	意	果	擔	引	慤

誠	依	偏	源	卽	得	必	入
是	諸	歸	信	證	難	獲	涅
爲	經	安	廣	法	思	於	槃
濁	論	養	開	性	議	信	門
世	撰	勸	一	之	往	喜	值
目	教	一	代	常	生	悟	直
足	行	切	教	樂	人	恐	心

決判得失於專雜
 迴入念佛眞實門
 唯定淺深於熱心
 報化二土正辨立
 源空曉了諸聖典
 憐愍善惡凡夫人
 眞宗教證興片州
 選擇本願施濁世

還來生死流轉家
 決以疑情爲所止
 速入寂靜無爲樂
 必以信心爲能入
 論說師釋共同心
 極濟無邊極濁惡
 道俗時衆皆悉共
 唯可信斯高僧說

世尊我一心 歸命盡十方

无碍光如來 願生安樂國

我依修多羅 眞實功德相

說願偈惣持 與佛教相應

觀彼世界相 勝過三界道

究竟如虛空 廣大无边際

正道大慈悲 出世善根生

淨光明滿足 如鏡日月輪

備諸珍寶性 具足妙莊嚴

无垢光炎熾 明淨曜世間

寶性功德草 柔輦左右旋

觸者生勝樂 過迦旃隣陀

寶華千萬種 彌覆池流泉

微風動花葉 交錯光亂轉

宮殿諸樓閣 觀十方无碍

雜樹異光色 寶欄遍圍遶

无量寶交絡

羅網遍虛空

種種鈴發響

宣吐妙法音

雨花衣莊嚴

无量香普薰

佛惠明淨日

除世癡闇冥

梵聲悟深遠

微妙聞十方

正覺阿彌陀

法王善住持

如來淨花衆

正覺花化生

愛樂佛法味

禪三昧爲食

永離身心惱

受樂常无間

大乘善根界

等无譏嫌名

女人及根缺

二乘種不生

衆生所願樂

一切能滿足

故我願生彼

阿彌陀佛國

无量寶王

微妙淨花臺

相好光一尋

色像超群生

如來微妙聲

梵響聞十方

同地水火風 虛空无分別

天人不動衆 清淨智海生

如須彌山王 勝妙无過者

天人丈夫衆 恭敬遠瞻仰

觀佛本願力 遇无空過者

能令速滿足 功德大寶海

安樂國清淨 常轉无垢輪

化佛菩薩日 如須彌住持

无垢莊嚴光 一念及一時

普照諸佛會 利益諸群生

雨天樂花衣 妙香等供養

讚諸佛功德 无有分別心

何等世界无 佛法功德寶

我願皆往生 示佛法如佛

我作論說偈 願見彌陀佛

普共諸衆生 往生安樂國

先請彌陀入道場
不違弘願應時迎
觀音勢至塵沙衆
從佛乘花來入會
一一光明相續照
照覓念佛往生人
欲比十方諸佛國
極樂安身實是精

瓔珞經中說漸教
萬劫修功證不退
觀經彌陀經等說
卽是頓教菩提藏
萬行之中爲急要
迅速無過淨土門
不但本師金口說
十方諸佛共傳證

直入彌陀大會中
見佛莊嚴無數億
三明六通皆具足
憶我閻浮同行入

四十八願成就して

正覺の阿彌陀と成たよふ
たのみとめけし人は皆
往生おならず定まりぬ

極樂無爲の報土には
雜行生ることおたし
如來の要法撰てる
專修の行とぞ教しむ

兆載永劫の修行は

阿彌陀の三字にたゞまれり

五劫思惟の名號は

五濁の我等に附屬せり

阿彌陀如來の三業と

念佛衆生の三業と

彼是金剛心なれば

定聚の位に定まれり

多聞諍戒にらはれず

破戒罪根きはれず

唯よく念佛するのみ

瓦礫も金と變しける

金剛堅固の信心は

佛の相續より起る

他方の方便なくしては

いかに決定の心とん

本願海のうちは

智慧の浪ころなかりけれ

弘誓の船に乗ぬれば

大悲の風にまかせたり

超世の悲願と聞しより

我等は生死の凡夫おは

有漏の穢身はおはらねど

こゝろは淨土に住あるふ

六八弘誓の其中に

第三十五の願に

彌陀のことに女人とは

引接せんと誓ひしか

もろくの雑行雑修自力の
ところをふりすて一心に
阿彌陀如來我等が今度の一
大事の後生御たすけ候へと
たのみ申て候たのむ一念の
時往生一定御たすけ治定と
存し此うへの稱名は御恩報
謝とよるとひまうし候ふと
の御ことばり聽聞まうしわ
け候ふこと御開山聖人御出
世の御恩次第相承の善知識

の淺からざる御勸化の御恩
と難有るむし候とのうへは
さためれかせらるゝ御掟一
期をおきりまもりまうす
く候

凡例

一本書は、施本の料に充つる爲に、可成的の廉價にて、正信偈和讃等を、一冊に印刷せしものなり、尙紙型をも取り置たれば、何時にても有志の需に應ずべし、

一正信偈和讃は、親鸞聖人報恩の爲に、選述し佛徳を讃嘆したまひたるものなれば、さきに縮刷せる蓮如上人の五帖

一部と共に、朝夕用ひて、謝徳の「つとめ」とせらるべし、

一勤行に、軽きと重きとあり、而して、此書に曲譜を附せざるは、諸家同じからざるに由る、宜しく識る人に就て、習練せらるべし、

一枚の所五首なれば、一枚の「彌陀の名號となへつ」の一

首を加へて六首引とし、

又九枚の道綽讚も五首な

れば、一枚の「五獨惡世の衆生

の」一首を加へて六首引とす

べし、

一高僧和讃の中にて「源空」の二

字を、「一派には文字の如く「グ

エンク」と讀み、一派には古實

に由り「シヨウニン」と唱ふ之

は各々其流義に順ふべし、

明治二十六年四月四日印刷
全 年四月 刊行出版

東京市本郷區本郷六丁目五番地

編輯者 兼發行者 阪田篤敬

印刷者 根岸高光

東京市牛込區市ヶ谷加賀町
一丁目二十三番地

發行所 哲學書院

東京市本郷區本郷六丁目
五番地



